



幾多の城主が去来した棚倉城

流転の城主たちを見つめてきた棚倉城も、藩政時代の終焉とともに姿を消し、明治という新しい時代へと移つていったのです。

しかし、完成を目前に白川へ移封されたため、築城は三代目藩主の内藤信照に引き継がれました。それから戊辰戦争で落城するまでの二四〇余年の間に、この城に去来した城主は八家二六代を数えます。

初代棚倉城主になつたのは、二代目藩主の丹羽長重でした。寛永二年(一六五)

この地にあつた近津明神(馬場都古和氣神社)を遷座し、その跡地に棚倉城の築城を開始しました。

町の中心にあつて、城下町の静かなたたずまいを今に伝える棚倉城跡は、本丸跡を土塁の外側に内壕がめぐり、春には五〇〇本の桜が他にさきがけていつせいに咲き誇ります。棚倉城は、別名「亀ヶ城」とも呼ばれています。「お濠に棲む大亀が水面に姿を見せると、お殿様が国替えされる」と言い伝えられるほど、藩主の変遷が著しかったという逸話が残っています。



樹齢数百年の古木が影を落とす宇迦神社

「亀ヶ城」とも呼ばれた棚倉藩六万石の政庁。過ぎ去りし日々の面影を、お濠の水に映し、城下の変遷を見守ってきた棚倉城は、戊辰戦争によって、二四〇余年の歴史を閉じ、新たな時代へと進んでいきました。

